



Title	第11号の刊行によせて
Author(s)	松村, 功啓
Citation	長崎大学留学生センター紀要. vol.11, p.i-ii; 2003
Issue Date	2003-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/5593">http://hdl.handle.net/10069/5593</a>
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T20:16:11Z

## 第11号の刊行によせて

今回のこの原稿を依頼されたのは締め切りまで日数もあまり無く他の仕事が出山積していたので、体験談になってしまうが準備のிரらない私の留学に係わる思い出を書かせていただいで役を果たしたい。

私が留学しようとした当時は国費留学の順はなかなか回ってこず、これを待っている日は暮れるので、将来性のありそうな米国の2人の先生、トロスト、シャープレス両先生に給料付ポスドクの地位を求めて手紙を書いた。私がちょうど30歳になったとき、1975年のことであった。戦後30年近く経っていて日本も豊かになりつつあったが、社会資本、生活実態において米国と日本にはまだまだ隔たりがあり、渡航費も現在の値段と大差なく、私費留学などとてもできない時代であった。二人とも、私より少し上の30歳を少し過ぎた若手のばりばりで世界の最先端を走り始めたばかりの先生方であった。ポスドク依頼の手紙を書くまでは一面識もなく、二人の名前は一流学会誌の報文から知っているだけであった。結果はトロスト先生からOK、シャープレス先生からはファンダが無いので……という返事をもらった。アジアの片隅からの一若者に両先生とも律儀に返事の手紙を書かれたわけで、ポスドク依頼の多くのメールに多忙を理由に返事を出さないときもある今の自分の姿勢に反省しきりである。当時の手紙は記念に今でも保存しているが、まさかその時、シャープレス教授がノーベル賞を受賞されるとは夢にも思っていなかった。2001年ノーベル化学賞を受賞された仕事、オレフィンの高立体選択的酸化、が世に報告されだしたのは私がお願いの手紙をだして4年後の1978年頃からであった。渡米当時は、むしろトロスト教授の方が一歩先んじていたように感じていた。爾来4半世紀余りが過ぎ、シャープレス教授は前述のごとくノーベル賞を、トロスト教授も数々の賞を受賞されあとはノーベル賞を残すぐらいとなって現在はお二人ともアメリカ化学会の大御所となっておられる。ともあれ、このような経緯で1976年2月からウィスコンシン大学のトロスト研で一年間のポスドク生活を送ることとなった。米国では、今でもそうであるが、教授一人だけで研究室を切り回す。研究室は、若干の大学院生と20数人のポスドクからなっていた。一人一人異なるテーマを教授一人で指導され、そのバイタリティーに感銘を受けたことを思い出す。そのような雰囲気の中でステロイドホルモンの合成研究で無事成果を

得、また米国の生活を大いに楽しんで一年後に帰国した。

この経験で感じたことは、若い時に留学の機会が与えられて幸せであったということである。何事にも感動した。研究面ではもちろんのこと、些細な日々の生活の一つ一つに。巨大なスーパーマーケット、プール付のアパート、キャンピングカーで夏休みを楽しむたくさんの人々、アメラグへの熱狂等々。しかし、これらの多くは現在の日本では現実化してしまった。情報量の少なかった当時であったから30歳位の年齢でも若かった時と書けるが、情報量の多い今は、当時の30歳が学部生あるいは大学院生の年代に対応するのではと思う。是非この年代の若い人たちに上記のような体験をしてもらいたいと思う。また日本から外国への留学だけでなく、諸外国の若い人たちが日本に来る場合でも、そのような機会が努力すれば得られるような諸制度の整備が大学に求められる。今、大学は差し迫った独立行政法人化のことで目の回るような忙しさである。その様な中でも、地味ではあるが、学生の送り出し、受け入れに関する留学制度を着々と整備していくことが魅力ある総合大学として肝要であると思う。その制度の一つとして短期留学プログラムがあり、今、具体化にむけての案が挙がってきている。この機会に、これに対する先生方のご理解とご協力をお願いしたい。

なお、今春、日本薬学会年会在長崎で開催された機会に現スタンフォード大学教授のトロスト先生を特別講演者として招待した。現在61歳になっておられるが、今なお40人以上の学生とポスドクを昔と変わらず一人一人指導しているとの由、若き時のバイタリティーをなお維持されていることに再び大いに刺激を受けたことを付記する。

平成15年6月

留学生センター長 松村 功啓